

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

no. 115

2022. autumn

KENBI LETTER

ケンビレター

合田佐和子展 ^{みち} 帰る途もつもりもない

Goda Sawako: A Retrospective

2022(令和4)年11月3日[木・祝]—2023(令和5)年1月15日[日]

※12月27日[火]—1月1日[日]は休館

《ロゼッタ・ギャラクシー（幾百万年の舟）》(13点組の1点)2000年 個人蔵

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

Exhibition Information - 01

キーワードで読み解く合田佐和子

11月3日からはじまる企画展「合田佐和子展 帰る途もつもりもない」は、高知出身の美術家、合田佐和子(1940~2016年)の生涯とその芸術を振り返る回顧展です。ここでは、合田展の見どころをキーワード別にご紹介します。文・塚本麻利(当館主任学芸員)

Keyword

オブジェ人形

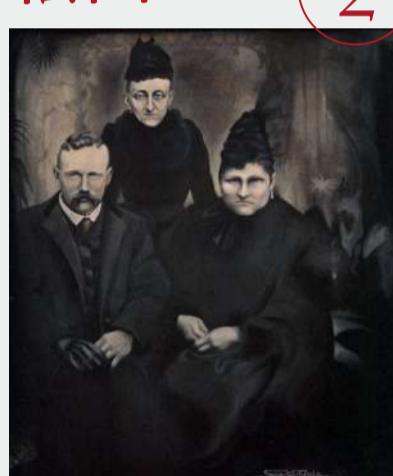
土佐中学・高等学校を卒業した合田は、上京して武蔵野美術学校(現在の武蔵野美術大学)に進学します。商業デザイン科でしたが、在学中は授業そっちのけで廃品収集に没頭、拾った廃品を使って作品制作をはじめました。初めての個展を開いたのは1965年、24歳の時でした。街で拾い集めた廃品を使った、オブジェとも人形ともつかない不思議な佇まいの作品は高く評価され、個展は成功を収めます。同年には初著書『オブジェ人形』も刊行され、合田は美術家として順調なスタートを切りました。



(八月の王(子))1963年 JEANS FACTORY蔵

Keyword

絵画



(祖父母たち)1972年 高知県立美術館蔵

②

60年代はオブジェ作家として廃品や粘土、石膏を使ったさまざまな立体作品を手がけた合田ですが、71年に渡米した時に拾った銀板写真をきっかけに、写真をキャンバスに描きうつスタイルで油彩画の制作を開始します。それまでも雑誌にイラストを提供したり、オブジェの表面をカラフルな図案で彩ることはありましたが、油絵具を扱うのは初めて。しかし「思い立ったら即行動!」の合田は、油彩画初心者にもかかわらずいきなり100号(つまり長辺が160cm超)の大型キャンバスを購入して制作スタート。記念すべき油彩画第一号が、当館が所蔵する《祖父母たち》です。拾った銀板写真をもとに描いた本作は、後の合田の絵画を予見する、妖しい雰囲気に満ちていました。



(対面)1971年 個人蔵



エジプトでの合田佐和子 1985年 撮影者不明

エジプト体験

Keyword

レンズ効果

Keyword



(ロゼッタ・ギャラクシー)(13点組の1点)2000年 JEANS FACTORY蔵

2022年11月3日[木・祝]—2023年1月15日[日]

9:00-17:00(入場は16:30まで)※12月27日[火]-1月1日[日]は休館

会場=高知県立美術館 第2・3展示室

観覧料=一般当日1,200円(960円)、大学生850円(680円)、高校生以下無料

※(1)内20名以上の団体料金、※年間観覧券所持者は無料、※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、難病患者手帳及び被障者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市長寿手帳所持者は無料。

主催=高知県立美術館(公益財団法人高知県文化財団)、高知新聞社、RKC高知放送

後援=高知県教育委員会、高知市教育委員会、NHK高知放送局、KCB 高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送

特別協力=芸術文化振興基金、公益財団法人花王芸術・科学財団

協賛=JEANS FACTORY

88年、合田には自分の意志と関係なく勝手に手が動く「オートマティズム(自動書記)」という現象が現れました。決定的だったのは、2点組の油彩画《青いまなざし》の制作時、仕上げが完了したと思った段階で、勝手に手が動いて画面に加筆してしまったという体験です。この時に頭の中に降ってきた「レンズ効果」という言葉を、その後の合田は考え続けることになります。合田がいう「レンズ効果」は主観的でとらえにくい言葉ですが、クローズアップカメラのレンズを通して見た世界や、そうしたレンズを使って撮影した写真を描く行為そのものを指すようです。合田は90年代以降、写真の上に貴石を置き、再度その状態で撮影した写真をもとに油彩画を描きました。「眼」を題材とした13点組の大作《ロゼッタ・ギャラクシー》もそうした手法を使って描かれた作品のひとつです。

Exhibition Information - 02

ARTIST
FOCUS

#03 角田和夫

土佐深夜日記—うつせみ
2022年10月29日[土]—2023年1月9日[月・祝]

※12月27日[火]-1月1日[日]は休館

高知ゆかりの作家を紹介する展覧会「アーティスト・フォーカス」。第3回目となる今回は、南国市在住の写真家・角田和夫さん(1952年-)の個展を開催します。撮影のため海外で過ごすことが多い角田さんですが、生まれ育ち、現在も拠点にしているのはここ高知です。今回の展覧会では、高知の街を写した《土佐深夜日記》を中心に展示します。ご本人に作品制作についてお聞きしました。

●角田和夫インタビュー

聞き手・朝倉芽生(当館学芸員)

Q. 写真を始めたきっかけは?

高校卒業後に就職した県外の会社で、陰湿ないじめに遭いました。夢や希望、やる気を失い、心の調子をひどく崩して数ヶ月で退職。高知に戻りました。ある時、3歳上の兄が心配して、ニコンのカメラをゆずってくれました。兄は大学の写真部に所属していたので、白黒フィルムの現像やプリントの仕方を教えてくれ、徐々にのめり込んでいきました。

Q. 普段、どのように撮影をされていますか?

私はストリートを撮影することが多く、その中でもアンダーグラウンドな世界に興味があります。基本的に白黒フィルムで撮影し、フィルム現像からプリント、フラットニングまで全て自分でします。デジタルカメラと違って1枚の写真が出来上がるまでにとても時間がかかります。

Q. 《土佐深夜日記》を撮影された、1980年代の高知の様子は?

当時、高知の夜の街にはたくさん的人が行き交っていました。ギターを肩にかけ、居酒屋などに入りしてそのチップで生活する「流し」や、売春を斡旋する「ポン引き」もいました。赤テントの屋台もたくさん並んでいました



(土佐深夜日記)より 1984-90年 作家蔵

ね。暴力団抗争の荒れ狂う時期で、あちこちに警察官も待機していて、カメラを持って徘徊していると「気をつけろ」と注意されたこともあります。

Q. 《土佐深夜日記》は、繁華街の中でも特に、ゲイバー「野ばら」とそこで働く叔父さんを集中的に撮影されていますね。

ある日叔父が、仕事中に踊り場の手すりにもたれ掛かって、「おおの、死にそうな」と咳き、肩で息をしていました。その後、叔父は即入院。アルコールで内臓のすべてがボロボロになっていたのです。見舞いに行くと、医師からは「いつ死んでも不思議ではない状態」と言われました。過酷な生活を送る叔父でしたが、いつも私や周囲の人々に気を配る優しい人でした。

Q. 展示を見た方にどんなことを感じてほしいですか?

私は若い頃、写真という自分を表現する方法を見つけ教われました。写真是私にとって心を癒すセラピーです。今、いろいろな差別や偏見などで辛い思いをしている方に、私の写真を見て何かを感じてもらえた嬉しいです。

展覧会報告

ワークショップ

「絵金の年中風俗絵巻アニメ化大作戦」開催

6月25日、漫画家のしりあがり寿さんを講師に、絵金の絵巻を題材としたアニメーション作品の素材を作るワークショップを実施しました。まずは、拡大印刷した巨大絵巻の上で絵を描きながら、キャラクターのアイディア練り。家族で協力して1シーンを作り上げたり、1人で沢山のキャラクターを描いたり、参加者のアプローチがそれぞれ個性的でした。絵を描き終えたら順番にセルフを収録。初めてマイクを前にして、恥ずかしがりつつ声を入れた人もいれば、声優顔負けの七色の声で魅せてくれた人もおり、それぞれドラマがありました。しりあがり寿さんもスタッフも驚くほど参加者の皆さん熱量が高く、大盛り上がりの1日となりました。完成したアニメーションは展示室で公開。それを見て、ついつい声を出して笑っていた若いカップルと、見終わった後に拍手をしてくれた小さな男の子が印象的でした。



写真左から 大きな絵巻を広げてお絵かき開始! / 参加者と交流するしりあがり寿さん / 完成したアニメーションは展示室で上映

佐藤健寿トーク「奇界／世界を語る」開催

「佐藤健寿展 奇界／世界」に関連し、7月16日、佐藤さんによるトークイベントを開催しました。テレビやラジオでのご活躍も目覚ましい佐藤さん。申込開始早々定員に達し、その人気ぶりに改めて驚かされました。イエメンの社会情勢や北朝鮮のキャバクラ事情など、実体験だからこそその臨場感溢れるエピソードと、膨大な知識に裏付けられた考察が、軽快でユーモア溢れるトークで語られる、圧巻の1時間半でした。イベント後には、ちょうど開催されていた赤岡の絵金祭りを訪問されるなど、高知滞在も満喫して頂きました。文・朝倉芽生(当館学芸員)

高知サマー
プロジェクト
2022

MUSEUM HABb INFO

想い出の企画
日韓英国際共同制作
館長寄稿 「ONE DAY, MAYBE いつか、きっと」②

「ONE DAY, MAYBE いつか、きっと」の公演が当館で行われたのは、2013年11月2日から9日までである。当初トリスタン・シャープから廃ビルを使いたいという要望があり高知でも候補地を探した。しかし、2011年6月の現地視察で当館が用意した廃ビルはすべて却下になり、美術館全体を使うという案が採用された。ちなみに廃ビルを使ったのは金沢のみで、光州では廃校が会場になった。2012年6月にはトリスタンの新作上演に合わせてロンドンで打ち合わせを行った。ロンドン到着日に同じホテルに宿泊した金沢21世紀美術館一行とレストランで食事をしたのだが、その日は私の誕生日でありサプライズで店からも祝福されたことは良い思い出である。

トリスタン率いるパフォーマンスカンパニー「ドリームシンクスピーカー」の作品の特長は、大規模な参加型作品ということは前回も書いたが、日中は展覧会を開催中で展示棟を使えないので夜間の公演となった。1回の参加者は35名前後と制限されており、夜7時開演にプラスして夜10時開演の回を加えた。作品のコンセプトは、光州事件で亡くなった人たちが現在の社会を見たらどう感じるかということであった。若林奮作の彫刻《石枕》のあるスペースを起点に、ガイドの案内で移動してゆく。県民ギャラリーに設置したスターバックス、ユニクロを模した店では、実際に飲み食い・買い物を行い、その後ほぼ全面スクリーンに囲まれた中庭を通り、ホール樂屋で観客は目隠しされて尋問を受ける。その後椅子を取っ払った能舞台横のスペースではお盆に親戚一同が集まるようにな宴會を行い、全ての客席に一輪の花が置かれたホール、ローソクに包まれた中庭を通過し、スタート地点である《石枕》の場所に戻る。《石枕》周辺は浅い池になっており、光州事件の犠牲者たちが池の向こうの冥界に帰ってゆくというシーンで終わった。



藤田直義(当館館長) 撮影:Nae Fukata

〒781-8123 高知市高須353-2 Tel.088-866-8000 Fax.088-866-8008 <https://moak.jp/>
発行:高知県立美術館 発行日:2022(令和4)年10月10日 デザイン:FULL DESIGN



[編集後記] Vol.112号に続いて、館長会心の寄稿文を紹介しました。勤続28年になる藤田館長。思い入れのある企画は数知れず、今後どのような珠玉のエピソードが紹介されるのか、ご期待ください。
(編集担当:茂木恵美子)

新コーナー

美術館ではどんな人が働いているの?職員やそのお仕事を不定期で紹介します。

美術館のなかのひと

第1回 監視員さん



当館コレクションのアンゼルム・キーファー作《アタノール》は巨大でインパクトがあり、好きな作品のひとつです。

勤続20年の大ベテラン西森さん。

Q. どんなお仕事をしていますか?

展示室で作品の安全を守り、来場者の皆さんに展示を快適に鑑賞できる空間をつくるため、見守り役に徹しています。世界にひとつしかない作品に囲まれ、やりがいを感じます。展示順路のご案内をしたり、時には展覧会の感想をお聞きしたりすることも。

Q. 仕事で印象的だった出来事は?

お客様のなかには、お気に入りの作品が展示されると必ず来場される方や、同じ展覧会に何度も足を運ぶ方がいらっしゃいます。作品の質問をお受けしたり、お客様との時間を共有することも楽しめます。

EVENT

開館記念日 ●11月3日(木・祝) 全館入場無料

開館29周年を記念して、誰でも展覧会を無料でご覧いただけます。当日は展覧会に関連したスペシャル・トークも開催予定。いずれも申込不要です。美術館の誕生日と一緒に祝いましょう。

◎作家本人による角田和夫展ギャラリートーク

11:00～(第4展示室にて)



◎合田佐和子展企画者によるクロストーク

13:00～(美術館ホールにて)

◎学芸員による合田佐和子展ギャラリートーク

15:00～(第2・3展示室にて)

ティーチャーズ・ウィーク ●11月20日(日)～26日(土) 教職員無料

11月20日(日)～26日(土)は、県内教員(国工・美術以外も含む)の方、学校職員の方は無料で当館主催の展覧会をご観覧いただけます。鑑賞後は簡単なアンケートにご協力ください。学校団体での来館や、展覧会を授業で活用いただけるよう、相談も受け付けます。どうぞお気軽にご参加ください。



◎11月19までに要電話申込 ☎ 088-866-8000